

跳跳蛙
日语读库



にほんご よむよむ文庫

Vol.1 **4** ③ ^{はし} 走れメロス



NPO法人 日本語多読研究会 主编
太宰 治 原著
(日) 栗野 真纪子 缩写
鯉江 光二 插图

跳跳蛙
日语读库



にほんご よむよむ文庫

Vol.1 **4** ③ ^{はし} 走れメロス

NPO法人 日本語多読研究会 主编
(日) 太宰 治 原著
栗野 真纪子 缩写
鯉江 光二 插图

外语教学与研究出版社
北京

京权图字：01 - 2008 - 1934

© Originally Published by ASK Co., Ltd., Tokyo Japan

图书在版编目(CIP)数据

跳跳蛙日语读库. Vol.1. 4. ③/ 日本 NPO 法人日语多读研究会主编. — 北京: 外语教学与研究出版社, 2008.5
ISBN 978 - 7 - 5600 - 7523 - 5

I. 跳… II. N… III. 日语—自学参考资料 IV. H36

中国版本图书馆 CIP 数据核字 (2008) 第 064619 号

出版人: 于春迟

责任编辑: 刘宜欣

装帧设计: 王 军

出版发行: 外语教学与研究出版社

社 址: 北京市西三环北路 19 号 (100089)

网 址: <http://www.fltrp.com>

印 刷: 北京国邦印刷有限责任公司

开 本: 880 × 1230 1/32

印 张: 1.375

版 次: 2008 年 7 月第 1 版 2008 年 7 月第 1 次印刷

书 号: ISBN 978 - 7 - 5600 - 7523 - 5

定 价: 34.90 元 (全四册)

* * *

如有印刷、装订质量问题出版社负责调换

制售盗版必究 举报查实奖励

版权保护办公室举报电话: (010)88817519

物料号: 175230001

日本語を勉強しているみなさんへ

「日本語をよむよむ文庫」は、

日本語を勉強しているみなさんのための「読みもの」シリーズです。

楽しみながらたくさん読んでください。

わかるものをたくさん読むと、知らないうちに漢字の読み方や言葉が身につきます。

読んだ話をCDでも聴いてみてください。読みながら聴いてもいいですよ。

目からも耳からもどんどん日本語を吸収しましょう！

「日本語をよむよむ文庫」4つのルール

- 1 やさしいレベルから読む。
- 2 辞書を引かないで読む。
- 3 わからないところは飛ばして読む。
- 4 進まなくなったら、他の本を読む。

メロスは、ギリシャのある村で羊を飼って
生活していた。

メロスには父も母もない。妻もない。十六
歳の妹と二人で暮らしている。

妹は同じ村のまじめな若者と結婚するこ
とになっていた。もうすぐ結婚式だ。だから、
今日、メロスは妹の結婚式の服や、みんなに
出す食べ物を買いにシラクスの市場に来た。
村からシラクスまで四十キロもある。

メロスは朝早く村を出発した。野原や山を
通って、十時間もかかってやっと町に着いた。



メロスはまず、買い物をして、それから、シラクスの大通りを歩いた。

メロスには、大切な友だちがいた。セリヌンティウスである。セリヌンティウスは、今、この町で働いている。

メロスはセリヌンティウスの家に行こうと思った。しばらく会っていないので、会うのが楽しみだった。

歩きながら、メロスは、町の様子がどこか変だと思った。静かすぎる。もう日も沈んで、暗かった。しかし、静かなのは、夜だからではない。町全体が寂しいのだ。

メロスはだんだん不安になってきた。道を歩いている若者に聞いてみた。

「何かあったのか。一年前にこの町に来たときは、夜でもみんな歌を歌って、町は大変にぎやかだったけど……」

しかし、若者は何も答えなかった。

しばらく歩くと、老人に会った。

メロスは、また同じ質問をした。

老人は答えなかった。

しかし、メロスがもう一度聞くと、老人は小さい声で答えた。

「ディオニス王は人を殺します」

「なぜ殺すのだ」

「王は、『自分を殺そうと思っているから、殺す』と言います。だれもそんなことは思っていないのよ」

「たぐさんの人を殺したのか」

「はい。初めは自分の妹の夫を殺しました。それから自分の息子を。それから妹を。それから妹の子どもを。それから奥様を。それから家来のアレキスを」

「驚いたな。王は頭が変になったのか」

「いいえ、そうではありません。人が信じられないと言つのです。最近は、家来が信じられない

と言つています。今日は六人も殺しました」

これを聞いて、メロスは大變怒つた。

——困つた王だ。なんとかやめさせなければ

いけない——

メロスは心がまっすぐな男だつた。悪いことは絶対に許すことができなかった。

メロスはセリヌンティウスの家に行くことを忘れて、王のいる城へ急いで歩き始めた。そして、買った物を持ったまま、城に入つていった。

彼はすぐに捕まえられた。メロスの持ち物からナイフが出てきた。





メロスは王の前に連れていかれた。

「このナイフで何をするつもりだったのか。言

えー」

ディオニス王は静かに、しかし強く言った。

「悪い王から人々を助けようと思ったのです」

と、メロスは答えた。

「おまえが？ おまえが人を助けられるのか？」

と、王は笑って言った。

メロスは怒って言った。

「どっして人を殺すのですか」

「黙れ。口ではどんないいことも言える。私には人の心がわかるのだ。おまえもみんなと同じだ。死刑にすると言われたら、きつと、今言ったことを変えるだろう。そして泣いて謝るだろう」

「私を死刑にするんですか。いいでしょう。それでも私は怖くありません。殺したかったら、殺してください。助けてくれとは言いません。ただ……」

メロスは下を見ながら言った。

「ただ、たった一人の妹のことが心配です。妹を結婚させてやりたいのです。私を殺すのは三日待ってください。その間に妹の結婚式をして、必ず、ここへ帰ってきます」

「ばかなことを言うな。そんなことは嘘だ。逃げた小鳥が帰ってくるはずがない」

と、王は低く笑った。

「必ず帰ってきます」

メロスは言った。

「私は約束を守ります。お願いですから、私に三日ください。妹が私を待っているんです」

すると、また王は笑って言った。

「口では何でも言える。そんな嘘を言つて、その間に逃げるのだらう」

メロスは言つた。

「そんなに私が信じられないのですか。では、私の一番の友だちを私の代わりに、ここに置いていきましよう。この町に住んでいるセリヌンティウスという男です。三日後、日が沈むまでに私がここに帰つてこなかったら、セリヌンティウスを殺してください」

それを聞いて、王は思った。

——この男は帰ってくるはずがない。しかし、この嘘を聞いてやるのも面白いかもしれない。そして、代わりの男を三日目に殺すのだ。そのとき、私は悲しい顔で、『人はやはり信じられない』と言つたらう。——

王は言った。

「よし、おまえの願いを聞いてやる。その、代わりの男を呼んでこい。そして、おまえは三日目の日が沈むまでに帰ってこい。遅れたら、その男を殺すぞ。……そうだ！ ちよつと遅れてくればいい。そうしたら、おまえの罪は許してやる」

メロスは言った。


「何を言つのですか」

「ハハハ……。自分の命が大切だったら、ちよつと遅れてくればいい。おまえの心はわかってる」

メロスは嫌な気持ちになつた。何も言いたくなくなつた。

——王は私の言つたことを全然信じていない。私が死にたくないから、友だちを代わりに置いていくと思つてゐるのだ——

セリヌンティウスは、夜遅く城に呼ばれた。



メロスとセリヌンティウスは、二年ぶりに会った。
メロスはセリヌンティウスに、王と約束したことを話
した。セリヌンティウスはメロスの目をじっと見た。
そして、二人は黙って抱き合った。

メロスはすぐ出発した。夏の初め、空いっぱい星が出ていた。

メロスは夜中、寝ないで歩き続けて、次の日の朝、村に着いた。日はもう高かった。村の人たちは、畑に出て仕事を始めていた。

メロスの妹は疲れた兄を見て驚いた。そして、どうしたのか、何があったのか、質問した。

「何でもない」

メロスは笑おうとしたが、うまく笑えなかった。

「シラクスに、またすぐ戻らなければならぬ。まだ用事があるのだ。その前に、おまえの結婚式をする。早いほうがいいだろう」

妹の顔が赤くなった。

「うれしいか。きれいな服も買ってきた。さあ、これから行って村の人たちに知らせてこい。結婚式は明日だ、と」

メロスは家へ帰って、結婚式の準備を始めたが、しばらくすると床に倒れて寝てしまった。

目が覚めたのは夜だった。

メロスは、起きてすぐに、妹が結婚する男の家に行った。そして、

「明日、結婚式をしてくれ」

と頼んだ。

男はとても驚いて、

「それはだめだ。まだ何も準備していない。もう少し待ってくれ」

と答えた。

メロスは、

「どうしても待てない。明日にしてくれ」

と、もう一度、強く頼んだ。

男も、なかなか「はい」と言わない。二人は朝まで話し合いを続けた。

とうとう男が「わかった」と言った。

結婚式は、その日の昼間に行われた。二回目の昼だった。

途中から黒い雲が出てきて、雨が降り出した。しばらくして大雨になった。結婚式に来ていた村の人たちは、大雨のことも気にしないで、明るく楽しく歌を歌った。

メロスも楽しく歌った。王との約束もしばらく忘れていた。

夜になって、パーティーはますますにぎやかになった。

メロスはずっとここにいたいと思った。この楽しい村の人たちと、ずっと生きていきたいと思った。しかし、今は、この体は自分だけのものではない。

メロスは王との約束を思い出して、出発することにした。

——明日の日が沈むまでには、まだ時間がたくさんある。少し寝てから出発しよう。その頃は雨もやんでいるかもしれない——

少しでも長く、この家にいたかった。